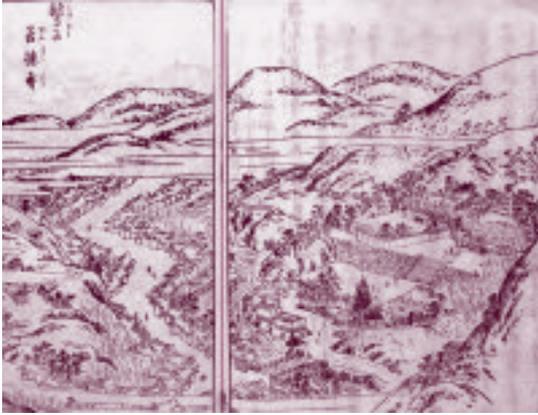


～鷺子善徳寺の有髪（あみ）の親鸞聖人座像～

◇二十四輩巡拝のにぎわい

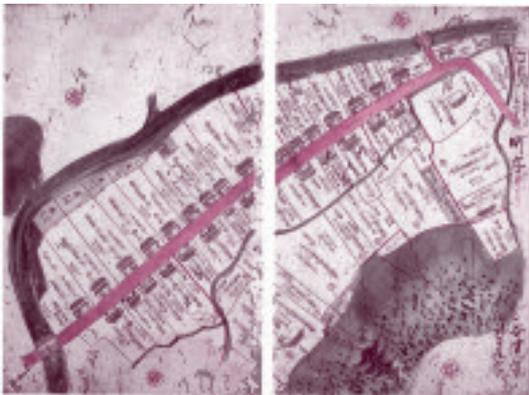


▲「二十四輩順拝図会」後編第2巻

鎌倉時代、浄土真宗を開いた親鸞（しんらん）は、その死後も子孫や弟子たちが各所で教えを広めていきました。「二十四輩（にじゅうよっぺい）」は、親鸞に直接教えを受けた関東の弟子たちを、親鸞のひ孫（ひご）の覚如（かくにょ）がのちにまとめたものといわれ、そのうちの6か寺が市内に存在します。善念（ぜんねん）が開いた善徳寺（鷺子）もそのひとつで、建保元年（1213）頃、南酒出（那珂市）に草庵を創ったのが始まりとされ、3世善明（ぜんみょう）の正和3年（1314）に現在地に移ったとされています。

その後、延徳元年（1489）に火災に遭い、再建されたのは寛永7年（1630）のことでした。これが現在の本堂で、市の指定文化財になっています。

善徳寺は、那須街道沿いに家並みが続く鷺子宿の北西端に位置しています。文化6年（1809）頃に描かれた「二十四輩順拝図会」には、緒川に沿った街道の両側に、鷺子宿の萱葺きの民家が建ち並ぶ様子が描かれています。幕末に描かれた鷺子村の絵図でも鷺子宿にはぎっしりと家並みが書き込まれていて、にぎやかだった宿の様子がわかります。



▲鷺子村絵図の「鷺子宿」

◇珍しい有髪（あみ）の親鸞像

善徳寺の宝物のひとつに、親鸞聖人の有髪（あみ）の像があります。親鸞は、宗教者もそうでない人も、念仏さえ唱えれば分け隔てなく極楽往生できるという「専修念仏（せんじゆねんぶつ）」を広めました。自ら「僧でもなく俗人でもない」ことを表現するため、髪を剃らず、僧侶には禁じられていた肉食や妻を持つことを実践しました。誰にでもわかりやすい教えは、多くの庶民の支持を集めたため、旧来の仏教宗派などからの攻撃に遭い、建永2年（1207）、僧籍を剥奪されて越後に流罪（りうざい）となりました。この有髪像は、5年にわたる配流の時の姿ではないかとも考えられます。

▲有髪（あみ）の親鸞座像

像は、高さ47.5cm、巾47cmの寄木造の座像で、制作時期は江戸時代前期から中期頃と考えられます。首に帽子（ぼうし）（僧が防寒のため頭にかぶったり首に巻いたりしたもの）を巻き、法衣をまとい、その上から袈裟（けさ）を掛けています。最大の特徴は、毛筋彫りに表した頭髪（かみ）の表現で、肩までの長髪を両耳に掛け、後ろに流しています。髪を剃った僧形の親鸞像は多く残されていますが、有髪（あみ）の木像はたいへん珍しく、全国でも数体が確認されているのみです。県内では、日立市専照寺に有髪（あみ）の親鸞の肖像画「有髪（あみ）の御影」が伝わりますが、こちらは短髪（みづかみ）の姿に描かれています。しかし両者とも、親鸞の壮年期の様相と見ることができ、越後配流の時35歳であったことを考えるとふさわしい表現といえるのかもしれませんが。また福岡県の浄慶寺には、毛髪（かみ）を植えた親鸞聖人の座像が伝わっています。

*****お知らせ*****

善徳寺は10月17日（土）、18日（日）に行われる指定文化財集中（ぼくりょう）の公開場所となっています。両日は有髪（あみ）の親鸞座像を含め、本堂、太子堂の仏像が一般公開されます（悪天候の場合変更あり）。鷺子宿や河内城などの周辺景観とあわせてお楽しみください。

文書館 ☎52-0571